
ふくいミュージアム

1984. 2 . 1

No. 4

福井県立博物館建設準備室



「新しい文化を形づくる」

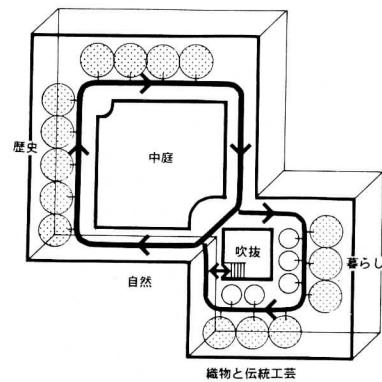
— 県立博物館の設計監理をおえて —

佐藤武夫設計事務所 細田雅春

今、博物館は新しい局面を迎えつつあります。現代社会が、広く博物館建築の領域をひろげつつあるからです。例えば、技術革新による環境の変化です。ニューメディア時代の新しい博物館の構想がいろいろ考えられています。かつての静謐な記念堂的博物館像は次第に変貌しつつあるといってもよいかも知れません。しかし、又、博物館は時代を超越した不動の姿勢も必要としています。深く根をおろした文化の担い手であるためには、単に一面の評価によって決められるものではないからです。そこには時代の新しさと同時に、時代を越えた環境（空間）の質が両義の世界としてえがかれる必要があるわけです。今、まさに福井県立博物館は新しい時代の中に古い歴史の遺産を背負って、その第一歩を踏み出したわけです。

この博物館は緑に囲まれた幾久公園の一角に建てられています。近くには県立美術館、市立図書館、福井大学等、文教施設が適度な広がりをもって、集まっています。このような環境は必然的に建築形態を、高さを抑えた水平感の強いものにしてしています。そして、建物自体が外部の広場を取り込むようなかたちで、また、建物の外周には福井城濠のイメージから生まれた芝生や樹木が植えられた濠状の緑地をもって、より一層、公園と建物が一体となるように工夫がされています。とりわけ、緑の濠に浮かんだ白い石貼りのデッキプラザ（石の広場）はグレーの建物をいただいて、あたかも、一隻の豪華客船の甲板のたたずまいをつくり出しています。

博物館の内部は地下1階、地上2階の3層に分かれています。地階には収蔵庫と主機械室、1階には入館者玄関ロビー、そして研究、教育普及のための諸室、管理部門、さらにロビーの一角に特別展示室が、2階には常設展示室が占有しています。こうした3層の構成は断面的には収蔵、研究、展示の機能が総合的に効率よく配置される結果を生み出しています。そして特に常設展示空間の□の字形の構成に



展示動線図

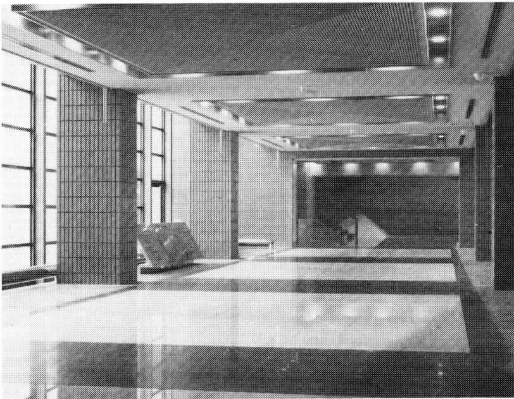
この建築の特色があります。建物の中心を中空（中庭）にして、展示空間が回遊性をもつように構成されている点です。（この空間構成は展示空間のみならず、建築の外部空間にも好ましい環境をつくり出します。）上図の太線の□の字形の主動線は、パネル展示等で全体が時系列に従って体系的に見ることのできる流れを、そして、小さなループ状の細線は主動線にそって、個別の物展示の流れが示されています。見方によって動線の選択が可能になるような仕組みが考えられています。又、建物の随所に設けられたガラスの開口部は建物の内外部を有機的に結びつける役割をもたせて、単調になりがちな博物館の空間構成に適度な抑揚を与えています。こうした空間構成のリズムは、博物館の中心的な象徴空間である大理石貼りの展示階段ホールと共に、博物館が単なる展示のための器としてあるのではなく、施設そのものが深い空間の余韻をつくり出すと同時に、新しいテクノロジーの時代にも呼応する環境の創出に心がけた結果生まれたものです。

博物館は開館を間近にして、新しい歴史を刻もうとしています。これからは特に県民の皆さまが、この博物館の担い手です。新しい文化の活動がこの博物館を通して、更に深いひろがりをもつことを願ってやみません。

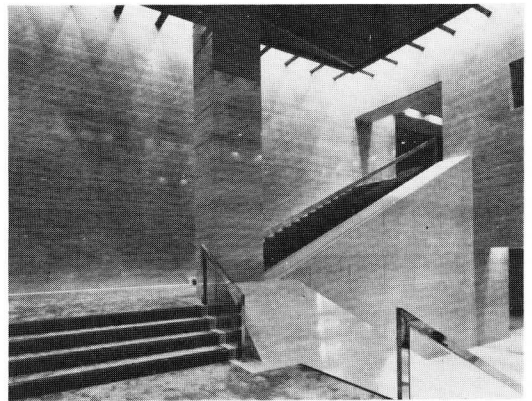
ご覧下さい！開館間近の博物館

建築延面積約9000㎡の広さを持つ福井県立博物館は、収蔵部門、研究部門、管理部門、教育普及部門、特別展示部門、常設展示部門に分かれており、各部門が機能的に利用されるように大小約40の部屋が配置されています。

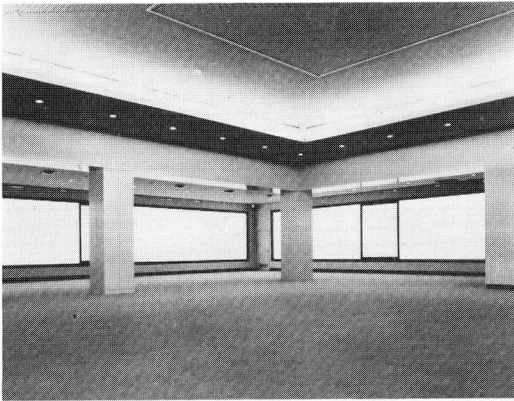
博物館の中のいくつかの部屋を紹介し、施設の概要をつかんで頂くとともに、開館後は、これらの様々な機能を持つ博物館を最大限に活用して頂きたいと思っています。



エントランスロビー



2階常設展示室への階段



常設展示室 ▶

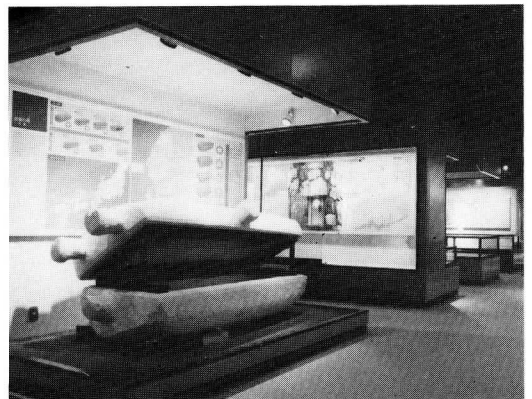
常設展示室は、自然・歴史・民俗・産業の分野別展示となっています。広い空間を有効に利用し、創意工夫をこらした展示技術によって展示が構成されています。

また、写真等のグラフィック資料や実物資料・映像資料で構成する「ガイドウォール」は、目で見ると大歴史年表といえるものです。

◀ 特別展示室

面積約500㎡の展示室で、館内外の主催による企画展の開催の場となります。幅約13mのウォールケースが2列、16mと6mがそれぞれ1列配置されており、広い空間で、多様な展示形式に対応できるようになっています。

また、休憩室を備え、ゆっくりと展示資料を鑑賞していただけるようになっています。



ビデオコーナー ▶

6つの小部屋（映像ブース）に仕切られたビデオコーナーには、12分～15分程の番組が26本用意されています。入館者がボタン一つで自由に選択して番組を見られるようになっています。

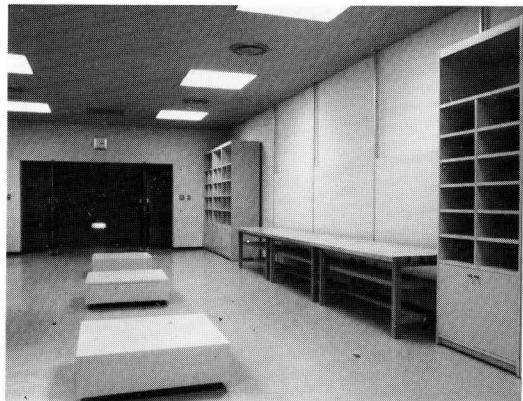
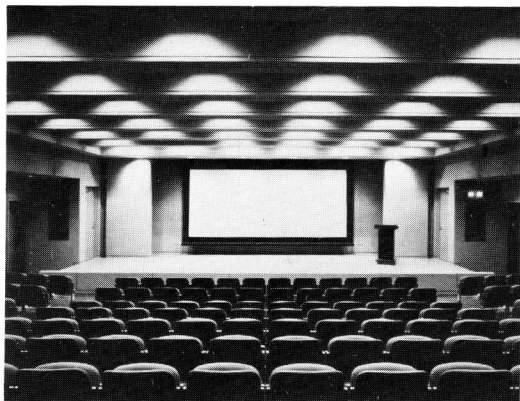


◀ 図書室

可動式書架となっており、約3万冊の図書が収納できるようになっています。可動式書架によって、空間の有効的利用がなされています。ここでは、各分野における調査・研究・教育普及の活動に必要な図書が配架されます。

体験学習室 ▶

ここでは、「モノに触れる・モノを動かすことのできる部屋、それらの体験を通じて能動的に学べる部屋」として、主に子供たちに開放し、楽しく学べる部屋として利用されます。化石や岩石、土器、民具等に実際に手で触れてみたり、動かしたりできます。また、野外実習場では、土器づくりもできるように計画されています。



◀ 講堂

講堂には、180席の座席が用意されており、音響装置や映画・スライド・ビデオ映写等の装置を備えた映写室をもち、講演会・映画会・研究発表会等の場として利用されます。

博物館資料の収蔵・保管について

博物館では、展示活動・調査研究の大前提となる資料収集活動を恒常的に行っていきます。県民の皆さまの御協力によって得られた資料やお預かりした資料は、展示室または収蔵庫で厳重な管理のもとに収蔵・保管されます。

博物館の地下には、延べ1,350㎡の巨大な収蔵庫を設け、資料の材質劣化などを防止するためにさまざまな工夫をこらしています。資料は、その内容・性格によって6室の収蔵庫に分けて保管されます。ここで、収蔵庫の各室を紹介します。

特別収蔵庫 (1)

遺跡などから出土した木製品はかなりの水分を含んでおり、空气中に放置すると急激に乾燥し、変形をきたします。これを防ぐために、当面、水、ホルマリン、ホウ酸・ホウシャの混合水溶液などに浸した状態で保存しておくのが、この収蔵庫です。大型の木器槽を備え、水道設備も設けて、液の交換が容易にできるようにしています。

特別収蔵庫 (2)

絵画・彫刻・工芸品など、温湿度の変化に特に注意を要する資料を収蔵します。強制的な空調により、温湿度を一定に保つ恒温恒湿収蔵庫で、内装は、湿度の変化を緩和する作用のある杉板張りにしています。木製の収蔵棚のほか、屏風専用の収納棚なども設けています。

特別収蔵庫 (3)

歴史分野の中心資料である古文書などは、他の資

料に虫害などの影響を与えるおそれが大きいため、専用の収蔵庫を設けました。棚に組み込める収納箱を用意し、分類・整理をしやすいようにしています。特別収蔵庫(2)と同じく、杉板張りの恒温恒湿収蔵庫です。

一般収蔵庫 (1)・(2)・(3)

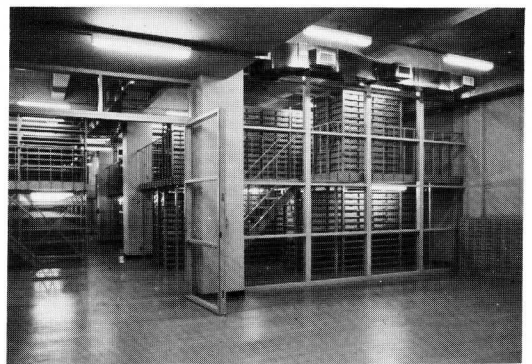
一般収蔵庫(1)はエレベーターに最も近く、未整理資料の仮保管、借用資料の一時的保管などを行います。また、一般収蔵庫(2)は農耕用具・漁撈用具などの民俗資料、(3)は化石・岩石・標本類などの自然系の資料と、土器・石器などの考古資料を収蔵します。いずれの収蔵庫も、棚は、収蔵能力を高めるため上・下2層の積層式で、重量物にも十分耐えられる構造になっています。温湿度の変化を抑える一般空調が行われます。

これらの収蔵庫に保管された資料は定期的にくん蒸消毒され、カビや虫の害を防止します。また、すべて系統的に分類・整理され、保管場所・形状・法量・旧蔵者・採集地などのさまざまな基本データはカードによりファイリングされ、すみやかに検索できるようになります。将来的には、コンピューターによる検索も可能にしたいと考えています。

資料の収集に始まり、これらの一連の作業を行うことにより、博物館は、県民の皆さまに対して資料についての情報サービス機関として、お役に立てることになるでしょう。



特別収蔵庫 (2)



一般収蔵庫 (3)

西谷山2号墳の発掘調査

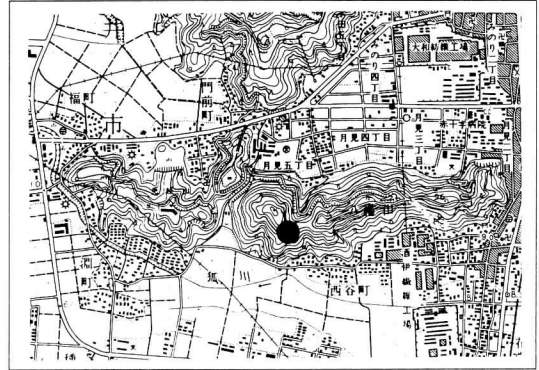
福井県は、古墳の内部主体として、4～6世紀を通して舟形石棺が集中する地域で、全国的にも注目されています。博物館の常設展示では、古墳時代のコーナーで、「王者の棺——石棺——」というテーマで、これを取り上げます。

準備室では、昨年(1983年)の6月に、福井市西谷山2号墳を調査しました。これは、西谷町在住の西村耕一氏から、過去に盗掘を受けた2個の石棺(西谷山2号墳出土)を寄贈していただいたことに伴うものです。

西谷山古墳群は、福井平野の中央部に位置する八幡山の西端、俗称西谷山の山頂(標高約130m)に位置し、6基の円墳から構成されています。大きくは、八幡山古墳群、兎越山古墳群、足羽山古墳群などと共に、足羽古墳群を構成しています。

西谷山2号墳は、南から2番目に位置する古墳で、径約24m、高さ約5mの円墳です。墳丘中央部よりやや北寄りに、封土をほんの少し残した状態で2個の石棺(1号、2号)が遺存していました。2号石棺の埋置された土壇内には、笏石の細片が若干散布しており、石棺を運搬後に調整したようです。また、墳頂部には円筒埴輪が存在していました。

1・2号石棺は、いずれも身・蓋ともに、長さ約240cm、幅約120cm、高さ約35cmの大きさで、刳抜き式の舟形石棺です。しかし、蓋は寄せ棟式の屋根形を呈しています。1号石棺は、蓋の棟幅が2号石棺よ



西谷2号墳の位置

り広く、平側の両側面中央部に縄掛突起を一つずつ付けるなど、新しい要素をもっています。両石棺の身には排水口が穿たれており、特に2号石棺は排水孔をもつものでは最も古いものです。身に排水孔を穿つのは、福井地方の一つの大きな特徴です。

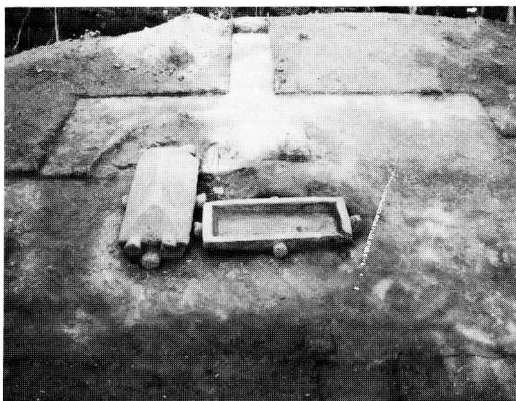
2号石棺内には、人骨が2体分遺存していましたが、1体は熟年の男性、他の1体は骨の数が少なく性別を明らかにすることができませんでした。このような合葬例は、龍ヶ岡古墳、宝石山古墳、新溜古墳でも確認されています。

副葬品については、1号石棺は盗掘が古く明らかではありませんが、2号石棺内外からは、鏡・勾玉・管玉・小玉・鎧・鉄刀・鹿角製刀装具・鉄槍・鉄鏃・鉄斧・刀子などが出土しています。

築造時期は、石棺の形態や埴輪・副葬品から5世紀なかば前後と考えられます。また被葬者は、足羽山、西谷山周辺地域を支配した首長と考えられます。

今回の調査で、舟形石棺の変遷が明確に把握できた意義は、大きいものがあります。現地には、調査の成果を書いた案内板を立てました。破損していた石棺は、ステンレス筋・樹脂などで接合復元し、博物館に展示します。また、調査の一部始終はビデオにおさめ、「古墳を掘る」というテーマで、博物館ビデオライブラリーで紹介します。御期待下さい。

(青木)



石棺の出土状態(右:1号石棺,左:2号石棺)

収蔵資料の一部から

素弁九弁蓮華文軒丸瓦 <受贈資料>

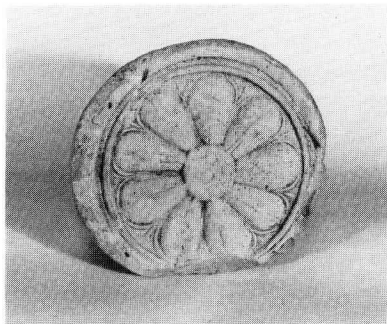
武生市深草廃寺出土 7世紀中頃
武生市深草1丁目 敦賀実氏寄贈

古代寺院の軒先を飾った軒丸瓦の文様は、蓮の花を文様化した蓮華文が一般的である。

この瓦は、面径13.5cmと小ぶりで、中房も小さく、1+5の蓮子が配される。蓮弁は、やや肉厚の素弁9弁で、弁の中央に凸線状の稜をもつ。弁端に輪郭線をもち、蕾形の間弁をつける点が特徴的である。

この種の文様は、奈良県奥山久米寺・平隆寺・中宮寺などで出土している高句麗系素弁文に影響を受けているものと思われる。

この瓦が出土した深草廃寺は、伽藍配置こそ明らかでないが、本資料をはじめとする古瓦の存在により、北陸でも最も早い時期に、この地域の有力な豪族によって建てられたことがわかる。(久保)



船箆筒 (懸硯) <受贈資料>

今庄町今庄 澤崎繁治郎氏寄贈

船箆筒は、懸硯・帳箱・半籠の3種類にわけられる。本資料は懸硯と呼ばれるもので、航海上に必要な船往來や海図などの書類や、商取引上に必要な帳書類を収納する箆筒である。

このような船箆筒は、特に北前船のように船主が荷主を兼ね、商売をしながら航海をするといった買積船の形態をとるようになってから作られるようになったものである。



本資料には、箆筒内に『隠州嶋後飯美村(現在の島根県隠岐島布施村) 坂脇屋住吉丸甚蔵 弘化三年(1846年)』と墨書されており、持主のわかる貴重な資料である。

(山形)

作り初めの大根 <受贈資料>

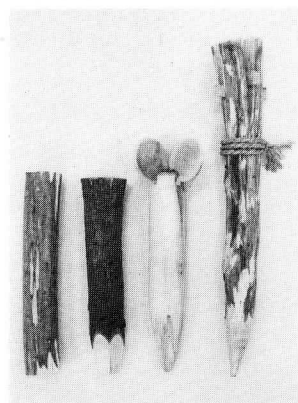
敦賀市、美浜町

正月には、1年間の幸福への願いを込めて、いろいろな儀礼が行われる。作り初めもその一つで、家の近くの田や畑に出て、形ばかり土を起こしたり、木の枝などを土にさして、豊作を祈るというものである。浄土真宗が広く分布している越前地方ではあまり見られないが、若狭地方ではごく一般的に行われてきた。

若狭の作り初めは、1月11日の朝行われる。多くの所では、稲の豊作を祈る行事として行われているが、敦賀市や美浜町では大根の豊作も一緒に祈られる。ダイコンと呼ばれる作り物を作り、畑にさすのである。左から、敦賀市奥麻生、同御名、美浜町山上のもの、右端はトアライミズと呼ばれる美浜町菅浜のものである。

畑作物は稲に比べるとたいへん儀礼が少ないが、ダイコンを用いることは、この地方の生活を考えるうえで興味深い。

(坂本)



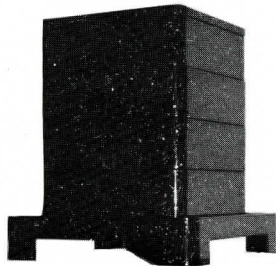
若狭塗り 四段重箱 <製作資料>

小浜市竜田 本間慶一郎氏製作

昭和49年「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が制定され、伝統的工芸品産業を地場産業として振興育成をはかることになった。本県では現在5品目が指定されている。若狭塗り製品は小浜市の特産として昭和53年に指定された。

若狭塗りは、彩漆を重ねて研ぎ出す「変わり塗り」という技法であり、その模様づけは、貝・卵殻・松葉等の「起こし模様」を用いる。

製作者の本間氏は50年以上の経験をもち、本製品も20回以上漆を塗り重ねたもので半年以上日数がかかっている。また松葉模様の研ぎ出しも光沢あふれる美しいもので、江戸時代以来の伝統に培われたものとい



(長坂)

旧県立福井高等女学校制服 一石田縞—

<製作資料>

石田縞とは、明治・大正を最盛期として、丹生郡立待村（現在の鯖江市石田下町周辺）を中心に織られた綿織物をいう。

当初は近隣村の需要をみたく程度であったが、やがて越前各地に売り出され、明治20年代にいざり機からボタン機にかわると、他県への移出も行われるようになった。普段着、布団の生地など一般的用途のほか、小・中学校、女学校の制服地にも採用された。特に、仁愛高女や女子師範の着物・袴スタイルは、当時の男性の憧れの的であったという。

写真は、県立福井高女が大正4・5年から昭和3年にかけて制服として使った着物。仁愛女子短大家政学科被服学研究室が、当時の卒業生から入手した布片を手がかりとして、手織機で復元したものである。(橋脇)



資料の収集活動は博物館の生命です。県民ひとりひとりがつくる博物館を目指して、準備室では次のような資料を皆さんから求めています。

- 自然……動植物や化石、岩石、鉱物などの標本。
- 考古……石器、土器、青銅器、鉄器、埴輪、古瓦、古鏡、経筒など。
- 歴史……古文書、古絵図、古地図、古写真、絵画、甲冑、刀剣、仏像、仏画、仏具、古い生活

用具など。

- 民俗……仕事着、ハレ着、飲食用具、田畑の用具、漁撈用具、年中行事の飾り、芸能の楽器。その他、繊維産業、伝統工芸に関するもの。

収集は、所有者や地元の意向を尊重しながら、寄贈・寄託及び購入等の方法で進めていきます。

これらの資料の提供、あるいは所在などの情報を大小にかかわらずお寄せください。お待ちしております！

資料の収集に御協力を！

開館よりひと足先に博物館の建物が完成いたしました。

幾久の公園に、グレーの大きな姿をすでに現しています。

内部では、展示工事のまっ最中。県立博物館のオープンは、いよいよこの4月です！

ふくいミュージアム No. 4 1984.2.1

編集 福井県立博物館建設準備室
発行 福井市大手3丁目17-1 (〒910)
福井県教育庁文化課内
☎ 0776-21-1111 ㊟ 4223
印刷 出口印刷株式会社